

宮澤賢治の協同組合構想

著者	中嶋 信
雑誌名	国際学研究
巻	6
号	2
ページ	7-15
発行年	2017-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10236/00025579

宮澤賢治の協同組合構想

中嶋 信*

The Cooperative Plan in the Works of Kenji MIYAZAWA

Makoto NAKAJIMA

要旨：宮澤賢治は1926年に農学校教師を辞め、農村救済のために、農民芸術の振興や農業技術の改良・普及活動に着手した。その実践は短期間で失敗した。ただし、賢治はその後も農村改良の意思を保ち続けていた。農民の自主的な協同組合による農村改造を構想していたことを、彼の作品から読み取れる。

Abstract :

After Kenji Miyazawa resigned from his teaching position at Hanamaki agricultural school, he started to work on his reformation plan of rural societies by promoting farmers' art activities and improving their agricultural skills. Although this attempt was failed at short, his enthusiasm for reformation of rural societies never ran out. It is reflected on his writing works that Kenji Miyazawa believed reformation of rural societies could be realized by functioning agricultural cooperatives created of farmers' responsibilities.

キーワード：宮澤賢治、農村産業組合、農村改造構想

1 課題と方法

この稿は、1931-33年頃の宮澤賢治最晩年における農村改造構想を検討する。具体的には詩「産業組合青年会」および童話「ポラーノの広場」を素材とし、「現実をつくり変えようとするプログラム」¹⁾の有無に焦点を据える。宮澤賢治の文芸上の業績はよく知られるが、彼の活動領域はそれにとどまらず、教育者・宗教家・農業技術者・社会運動家など、多面的な実績を残している。この稿では文芸作品をまず取り上げるが、当時の農村社会問題や社会運動に関わる賢治の模索について、主に社会科学的方法を用いて検討する。

賢治は花巻農学校教諭を1926年3月に依願退

職して、下根子桜の宮澤家別宅で独居自炊の生活を始めた。自ら主宰する羅須地人協会を拠点に、独自の農村改造戦略である「農民芸術概論綱要」を実践するためだ。ところが、警察から左翼政党・労農党に協力したとの嫌疑を受けたのを契機に、1927年に協会の活動を事実上停止する。さらに、1928年8月には病気のため活動拠点から撤収し、長期の自宅療養生活に入る。なお、1931年に病状が小康を得たので農地改良のために石灰の普及事業に協力し、個別の農事指導にも応じていたことは知られているが、自らが「本統の百姓」になることにも、「われらのすべての田園とわれらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の芸術に創りあげようでないか」の目標に接近する

*徳島大学名誉教授

1) 米田佐代子「平塚らいてうと宮澤賢治の『協同』思想」(『山梨県立女子短大紀要』第30号・1997年)91頁。

ことにも、事実において失敗した。その原因はどこにあるのか。

農業技術に詳しい中島紀一は、賢治が地人としての活動を開始した1926年の「農業労働詩」を考察して、「農民の労働観や生活感の成熟を読み取ることができない」²⁾と断定する。にわか百姓の力不足は当然であろう。ただし、1927年の「農事詩」では、その未熟が克服され、農家と共に生きる農業技師の決意がみなぎるものへと成長したと評価する。「農民の白い目」に晒されつつも、羅須地人協会の同志の支援も受けて、肥料設計や栽培管理においても技術指導の改善が図られたようだ。ところが、「当時、岩手の近代稲作が抱えていた問題点は、そうした個別の技術的努力で解決できるようなものではなかった」³⁾。彼は「大冷害・農業恐慌・地主制などの大きな社会的問題に直面する。さらに、病状の悪化によって、賢治は農村改良活動から撤退を余儀なくされる。こうした経過は賢治の戦略の挫折と見なされ易いが、評価は慎重であるべきだ。農業改良普及員の経歴を持つ戦後農民運動の指導者・小林節夫は「賢治の生存中はまだ冷害のメカニズムも研究解明されていなかった」⁴⁾と当時の農業技術の限界性を強調する。確かに目標未達成の責めを賢治に一方的に負わせるのは適当ではない。ただし、農業技術の限界を越える社会的課題の打開に、宮澤賢治はいかに迫ろうとしていたのかは問わねばならない。

第一次世界大戦終了から満州事変突入までの局面は「戦間期」と呼ばれる。それはこの時期に日本の実戦が途絶えたことに基づくが、その後の長い戦争への準備が進んだ。当時の代表的思潮では社会主義の影響力が一気に衰退し、国粋主義が取って替わる。反政府的な思想や行動を弾圧する治安維持法体制が整い、軍部の勢力膨張が続いた。そして、自由主義的な言動すら厳しく戒められた。では、宮澤賢治もその時代の波に飲み込まれ、無抵抗に流されていたのだろうか。

羅須地人協会時代に書かれた詩「何をやっても間に合わない」からは、失敗するのだが、農家副業の推進で経営改善を模索する様を読み取ることができる。「春と修羅 詩稿補遺」に収録されている「こっちの顔と」には、「けれどいまになって われわれが気候や 品種やあるひは産業組合や 殊にも塩の魚とか 小さなメリヤスのも、引だとか ゴム沓合羽のやうなもの かういふものについて共同の関心をもち 一緒にそれを得やうと工夫することは じつにたのしいことになった」と、協会での議論の一端が描かれている。技術改良にとどまらず、産業組合（主に農村協同組合）などを通じて農村社会の改善を図り、「もっと明るく生き生きと生活をする道」（「農民芸術概論綱要」）を模索していたと判断できよう。また、混乱する農村社会を統合するために、政府は産業組合拡充運動を推進したのだが、賢治がめざす産業組合像はこれとは異なった方向を志向していた。こうした事実とその意味を以下に考察する。

2 詩「産業組合青年会」の作成経緯

1933年9月21日に宮澤賢治が病没する。詩「産業組合青年会」はその直後に『北方詩人』10月号に掲載された。まず、賢治がこの詩に寄せた思いを考察しよう。表1・関連年表に示すように、昭和恐慌後の混乱期にあたる。農産物価格の著しい暴落があり、東北では連年の不作も加わり、窮乏の農村では各種の紛争が頻発していた。そして、社会体制に対する不満が高まり、右翼農本主義者が「窮乏農村を救え、満蒙開拓を」と煽る時代である。また、産業組合拡充五カ年計画の第一年度で、農村は産業組合への加入や信用・販売・購買・利用事業の拡充が叫ばれる騒々しい状況にあった。満州事変に続き本格的な戦争が予感される混迷した状態の中、賢治はこの詩の第16～22行で、産業組合による農村改良への期待を朗らかに語り、村の若者たちが明るい未来を語り合う様子を描いている。ただし、出だしと末尾に

2) 中島紀一「地人の道を歩もうとした宮沢賢治－農業技師という側面から－」（農民文学会・季刊『農民文学』296号・2012年2月）10頁。

3) 同上、13頁。

4) 小林節夫『農への銀河鉄道－いま地人・宮沢賢治を－』（本の泉社・2006年）184頁。

表 1 賢治の協同組合構想の関係年表

年次		年齢	私生活	制作活動	社会事情
1924	(T.13)	28 歳	8/ 農学校で「ボランの広場」等上演 10.5 「産業組合青年会」草稿	4/『春と修羅』出版 12/『注文の多い料理店』出版	1/ 第 2 次護憲運動 9/ 学校演劇禁止
1925	(14)	29 歳	6/ 保阪嘉内との交信断絶	2/ 森佐一『貌』に寄稿 9/ 草野心平「銅鑼」同人に	4/1 農林省独立・産組課新設 5/12 治安維持法公布
1926	(15)	30 歳	3/ 農学校退職 4/ 桜に独居自炊 夏/ 羅須地人協会発足	1/「オッベルと象」発表 2-3/「農民芸術概論」講義	3/ 労働農民党結成 12/1 労働党稗和支部結成
1927	(S.2)	31 歳	羅須地人協会講義 肥料設計・稲作指導	4/ 南斜花壇を設計 詩作・一部発表	3/ 金融恐慌 7/ 芥川龍之介没 12/『労農』創刊
1928	(3)	32 歳	3/ 肥料相談所で肥料設計 6/ 大島旅行 8/ 肺炎で自宅療養	3/「稲作挿話」を発表	2/20 第 1 回普通選挙 4/26 産組大会で産組主義宣言
1929	(4)	33 歳	病床生活 4/ 父選挙落選	作品推敲	5/ 小林「蟹工船」連載開始 10/24 世界恐慌開始
1930	(5)	34 歳	病状小康 4/ 花壇づくり 4/ 鈴木東蔵と合成肥料相談	文語詩・短歌作 碎石工場献策等を書く	1/ 昭和恐慌 糸価暴落 11/14 浜口首相狙撃
1931	(6)	35 歳	2/ 東北碎石工場技師（宣伝販売） 9/ 東京で発病	「ボラーノの広場」重要な手入れ 11/3 「雨ニモマケズ」書く	三月事件 9/18 満州事変 東北・北海道冷害凶作
1932	(7)	36 歳	石灰の宣伝販売に協力 自宅療養	3/「グスコープドリの伝記」発表	5・15 事件 8/23 臨時（救農）議会 3/ 満州国建国 東北地方冷害
1933	(8)	37 歳	自宅療養 9/21 病没	6/「産業組合青年会」完成 10/ 同上発表	1/ 産組拡充計画 3/27 国連脱退 4/8 産青連全国聯合結成

冷や水を浴びせるようなフレーズが置かれている。守旧的な勢力による抑圧に対する困惑も交錯しており、賢治の意図を読み取るのはやや難解である。

三一三 産業組合青年会 一九二四、一〇、五、

祀られざるも神には神の身土があると
あざけるやうなうつろな声で
席をわたったそれは誰だ
……雪をはらんだつめたい雨が
闇をびしびし縫ってある……

まことの道は
誰が云ったの行ったの
さういふ風のものでない
祭祀の有無を是非するならば
卑賤の神のその名にさへもふさはぬと
いきまき応へたそれは何だ
……ときどき遠いわだちの跡で
水がかすかにひかるのは
東に畳む夜中の雲の
わづかに青い燐光による……
部落部落の小組合が

ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち
村ごとの、また、その聯合の大きなものが
山地の肩をひとつとこ碎いて
石灰岩末の幾千車かを
酸えた野原にそゝいだり
ゴムから靴を鋳たりもしやう

……くろく沈んだ並木のはてで
見えるともない遠くの町が
ぼんやり赤い火照りをあげる……

しかもこれら熱誠有為な村々の処士会同の夜半
祀られざるも神には神の身土があると
老いて咳くそれは誰だ

この詩の草稿から発表までの経緯を、栗原敦や浜垣誠司らが精緻に解明している⁵⁾。その要点は以下の通り。1924年10月5日、花巻農学校教師は近郷の農村青年の集まりで農事講習を行い、談話は産業組合による農村改良にも及んだ。ただし、同席した老人が、慣習を損ねる言動に苦言を呈し、教師・賢治を批判する場面もあった。賢治はその帰路、紫波町南日詰付近でこの詩の草稿を書いた。その後、下書き、次いで定稿へと進み、

5) 栗原敦「はげしく寒く - 「産業組合青年会」と「業の花びら」」（栗原敦『宮澤賢治 透明な軌道の上から』新宿書房・1992年、初出1990年）。

推敲を重ねて「春と修羅 第二集」に編入した⁶⁾。「産業組合青年会」の題は「定稿用紙」に記されている。賢治がこの用紙を入手したのは1933年6月。つまり、着手から九年後の賢治が亡くなる年に題が付き、完成し、さらに若干の手入れ後に寄稿され、発表された。

1933年には、産業組合を拡充して窮乏の農村を救うという運動が全国を覆い、その動きの前衛に当たる産業組合青年連盟（産青連）の動きが注目されていた。産青連は1933年に全国的な組織整備が進み、各地で産組拡充運動を推進した。草稿や下書き稿では複数のテーマが錯綜していたが、その年に主題が産業組合および青年組織へと収斂させられ、題が確定した。賢治が産業組合の動向に期待していたためと考えられる。

なお、賢治が九年前に意気投合した青年の組織は、タイトルに「青年会」と記されるように、産青連とは別の組織と推定すべきであろう。この詩の草稿が残されており、草稿三には「……今日のひるま ぎりぎり鉄筆で引いた 北上川の水部の線が」と記載されている。講習の教材として、謄写版で関連地域の土壌図を作成したのだろう。この会合は、農会が主導する集落単位の農事改良講習会のようなものと推定すべきだ。産青連組織の可能性を排除する根拠のひとつは、草稿には産業組合の組織や事業に関する記述がないことだ。「雑誌発表形」の第16～22行の原型は「下書き稿(二)」で初めて登場する。浜垣の考察から、これは1930年秋頃より以降の作業と推定される。次に、産青連は特に産組への全戸加入や事業全利用を最優先課題に掲げたのだが、一連の原稿にはその記述が含まれていない。加えて、全国各地の産青連結成が勢いづくのは1933年頃であり、産組運動の後進県・岩手で1924年に産業組合の青年組織が活動する可能性は極めて低い。これらから、賢治は、昭和恐慌（1930年）後の混迷状況に直面して、産業組合による農村改良の構想を持ち、その希望を表現するために、九年前の青年た

ちとの交流を素材にした草稿に手を入れ、詩を完成させたと推測すべきであろう。

大島丈志は、九年前の草稿で賢治が描いた構想が、昭和初期に現実化されつつあったのでこの詩を『北方詩人』に投稿したと推定している⁷⁾。産業組合や産青連への国民的関心の高まりに共感して、賢治はこの詩を選んだことは妥当としても、賢治の夢が現実化される状況と判断することには疑義がある。まずはこの詩に表現される厳しい対立構図を見逃してはならない。期待と困惑が交錯する状況を正しく理解するには、賢治が産業組合に寄せる期待の内実と、当時の産組運動の実態を考察することが必要である。

3 「ポラーノの広場」の作成経緯

宮澤賢治が、農村改造の方策として協同組合社会を構想していたことは、ほぼ同じ時期に改作された童話「ポラーノの広場」の終盤部分の記述からも読み取ることができる。同作品では、記録者・キューストが若者ファゼーロらと交流する。彼らは、そこに行けば「からだいっばい勢がよくて面白いやうなさういふポラーノの広場をほくらはみんなでこさへやう」と衆議一決。「新しいポラーノの広場の開場式」となる。しばらく後に、キューストは次のような情報を得る。

それから三年の後にはたうたうファゼーロたちは立派な一つの産業組合をつくり、ハムと皮類と酢酸とオートミルはモリーオの市やセングードの市はもちろん広くどこへも出るやうになりました。

「ポラーノの広場」は文圃堂が1934年に刊行した『宮澤賢治全集』の第三巻に収録され公表された。ただし、現在の形に至るまでに大きな変遷を経たことに注意すべきだ。天沢退二郎による考察では、1924年には先駆形「ポランの広場」があり、これが1927年に「ポラーノの広場」（初期形）へと改作された。この鉛筆書きの作品は、さ

6) 浜垣誠司「祀られざる神・名を録した神」（ブログ『宮澤賢治の詩の世界』<http://www.ihatov.cc/blog>、2006年）。

7) 大島丈志「詩「産業組合青年会」をめぐる」（『宮澤賢治の農業と文学』蒼丘書林・2013年、初出2003年）。

らに1931年に黒インクによる重要な手入れが行われて同（後期形）の完成となった。ところが、1974年の校本全集以前は「黒インクによる末尾部の大幅改作という点が気づかれぬまま」⁸⁾初期形と後期形とが混淆されていたため、困惑や批判を招いていた。

小稿の課題との関わりで1931年の改作の意味を確認しよう。初期形と後記形とでは「ポラーノの広場」で営まれる事業のイメージが異なっている点が重要である。初期形では冬期間の相互学習や農産副産品の製作・交換などが述べられる。これは1926年に発足させた羅須地人協会の活動と重なっている。だが、後記形ではそれらが削除されて産業組合設立の趣旨が明確に描かれている。羅須地人協会における農業技術や農民芸術の普及活動は挫折した。賢治はその後、農村改造の方途を農村産業組合の組織や事業に求め、それが改作された作品に投影されたと理解できよう。多田幸正は「あのモリス的な理想世界からは、明らかな後退」⁹⁾と評価する。評価の基準は十分に検討されるべきだが、大きな方向転換であることは確かである。

上述のように、宮澤賢治は「産業組合青年会」や「ポラーノの広場」の下書き稿に手を加えて作品を完成させつつ、産業組合によって農村を改良する計画を新たに提示した。1931年の「ポラーノの広場」（後記形）の改作では、産業組合の協同活動で農村恐慌から脱出する方向を示し、33年の「産業組合青年会」の完成形では、勢いづく産業組合拡充運動に関して、青年たちの積極的関与への期待が表明されたのだ。羅須地人協会による実践からの退却（1928年）や現状肯定的な「雨ニモマケズ」（1931年）の表現から、賢治は農村改造のプログラムを放棄したとの理解を招きやすいが、それは妥当ではない。そのことの意味や可能性について考察を続けよう。

4 協同組合運動の多様性

宮澤賢治は農村の現実を嘆き、農村改良を懸命に模索した。ただし、自ら「農村経済」の理解不足を認めるように、目標とすべき社会を実現する「方法論の貧しさ」¹⁰⁾は明らかである。賢治は社会主義政党・労農党への共感を作品で吐露し、実際に支援することもあったが、レーニンの『国家と革命』を退けたと伝えられている。また、有島武郎のように小作農に農地を解放したり、武者小路実篤の「新しき村」のような社会改造を手がけてはいない。しかし、農業技術の改良と農民芸術活動のみに終始したと断じるのは正しくない。社会改造の進路として階級協調的な協同組合社会を構想していたことは、先に引用した詩「産業組合青年会」や童話「ポラーノの広場」の文章から確認できる。

まずは産業組合による販売や製造加工の協同事業が農村を改良するという希望が率直に記されている。昭和初期には岩手県内で農村医療組合の先駆的結成があり、「医薬を頒ち」はそれを反映するものと思われる。農業に関わる信用・販売・購買・利用事業の「四種兼営」産組が政策的に追求されたが、賢治の構想も、販売や加工に関心が高そうだが、総合的に事業展開する農村協同組合である。

次に、「部落部落の小組合が」や「ファゼーロたちは」など、事業主体が明快である点に留意すべきだ。賢治の協同組合構想は自立した個人が運営主体であって、生産・生活上の共同の範囲（部落・集落）を基礎単位としている。事業の発展と共にこれらがさらに広域的な聯合体を構成する図式である。これに対し、「官・民一体」で推進された当時の産組拡充運動では全国的な枠組みが実態として先行しており、県・町村・集落の組織はその下部組織に位置づけられていた。産業組合とひとくくりになされがちだが、両者の社会的機能は

8) 校本宮澤賢治全集「第十卷月報」（1974年3月）「編集室から」による。編集者の一人・天沢退二郎は1985年刊のちくま文庫版『宮澤賢治全集』7の「後記」で、作者の手入れおよび公表の経緯などを解説している。作品の経緯の説明はこれらによる。

9) 多田幸正『宮澤賢治 愛と信仰と実践』（有精堂出版・1987年）175頁。

10) 中村稔『定本 宮澤賢治』（七曜社・1962年）76頁。

表2 産業組合員に関する全国の動向

	1912年	1915年	1920年	1925年	1930年	1935年	1940年
産業組合数	9683	11509	13442	14517	14082	15028	15101
組合員総数(万人)	95	129	229	364	474	580	771
1組合当たり組合員数(人)	112	124	188	272	360	418	550
農業者組合員数(万人)	44	107	184	269	342	406	520
農家の加入率(%)	8	13	33	48	61	72	95

原資料：農林省『産業組合要覧』

自ずと異なるはずだ。

近代的な協同組合は伝統的な相互扶助組織とは異質な原理に立つ。農協論研究者の太田原高昭はこれを「古い共同の目的が共同体そのものの存続にあるのに対して、新しい協同は共同体の解体と近代的自我の確立を前提とし、自立した個人の意志によって成立する」¹¹⁾と規定している。賢治はまさに「新しい協同」を志向していたと考えられる。

日本の協同組合制度の起点は1900年の産業組合法に求められる。法の対象は都市の消費者組合なども含み多様であるが、内務大臣品川弥二郎らが法を整備した主眼は、「国家の堡壘」である自作農中堅・中農上層の保護に置かれていた。ただし、表2に示すように農民の関心は概して低く、産組加入農家の比率は1915年で13%、1920年で33%にとどまっており、経済的自立に欠ける状況を反映して、参加階層は地主や上層農家に偏寄していた。また、産組事業の内実も地域の農業構造を反映して地帯差を含み、表3のように岩手など東北は後発・停滞的に推移していた¹²⁾。事業分析は割愛するが、全体的に不調で「自立した個人の意志」は弱く、1930年の時点では農村経済を安定させる社会的機能は貧弱であったため、行政が主導する産組拡充運動が必要とされたのだ。

1920年代は地主・小作の階級間対立が激化し、さらに農家経済が全般的に悪化して負債問題が深刻化しており、農村問題が重要な社会問題となった。農林省はそのために、全農家を産業組合に加

表3 農家の産業組合加入率の推移(地帯別)

単位：%

	全国計	東北6県	近畿6県	群馬・長野	北海道
1913年	14	12	18	22	1
1917年	22	18	25	30	6
1920年	33	22	36	44	12
1927年	52	38	59	66	24
1931年	62	48	69	87	30
1933年	66	58	72	87	41
1935年	72	69	77	91	49
1939年	91	81	91	106	66

原資料：農林省『産業組合要覧』

入させて、低利金融や共同販売などで農家経済を改善する方策を提起した。そして、これに呼応する形で、産組中央会主事・千石興太郎が主導する産業組合主義運動が瞬時に全国に広げられた。1928年の全国産業組合大会は「産組主義宣言」を採択し、農村危機打開の社会運動を呼びかけた。さらに、産業組合拡充五カ年計画が1933年から開始された。本質は政府が企画する農村対策だが、反資本主義的な外見を示しつつ「窮乏打開」のエネルギーを包摂する大衆的運動の形式を伴ったことで、組織・事業の大飛躍を可能にした。その受容基盤は農村の貧困そのものであった。農林省が1930年に行った「全国赤字農家調査」によれば、小作農家の76%、自作農家の59%が赤字と報告されている。とりわけ東北地方では冷害凶作が加わり、「人買い」が村々を回り、

11) 太田原高昭ほか編『農業団体史・農民運動史』(農林統計協会・2014年)3頁。同書は日本の農業協同組合の組織・事業の展開過程を提示する。

12) 田畑保「北海道における産業組合の展開過程に関するメモ」(農林省農業総合研究所北海道支所『研究季報』No.53・1973年)による。

借金返済に娘を売るという痛々しい状況が広がっていた。

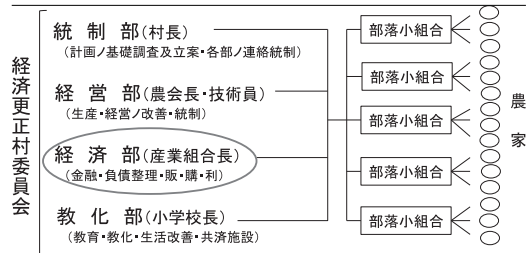
欧州の協同組合運動の思想や政策が、日本では産業組合主義と修正されて急展開したのだが、1920年代には資本主義批判の社会状況を反映して、別の理念・形態に基づく協同組合運動も成長した。たとえば都市無産階級の消費者協同組合がある。1922年には消費組合連盟が発足し、1926年には組織も増えて関東消費組合連盟（関消連）に名称を変更している。関消連は綱領に「我等は営利主義に基ける資本主義経済組織の改造を期す。我等は諸他の無産階級の運動と相提携して目的の実現を期す。」掲げ、反体制的な社会運動を模索していた¹³⁾。また、多面的な社会運動家・賀川豊彦も、救貧運動に加えて防貧運動に着手し、友愛社会を実現する運動の一環としてキリスト教倫理に立つ消費者組合の結成に取り組んだ。現在のコープこうべの前身・神戸消費者組合は賀川の指導により1921年に発足した。賀川が企画した協同組合計画には製造業や医療事業、さらに質屋など多様な社会改造事業が含まれている¹⁴⁾。

反体制的な社会運動が厳しく抑圧される中で、協同組合運動というわずかに残された領域で社会改良・改造の運動が展開したことに注目しよう。では賢治が目指す協同組合像はどのような位相にあるのか。個人の自立や高い倫理性を重視する賀川の主張と親和的といえる。なお、「農民芸術概論綱要」ではW. モリスへの傾斜が認められることから、彼の共同体社会主義を直接吸収して、協同組合像を描いたことも考えられる¹⁵⁾。だが、この点の資料は不十分で、断定は留保せざるを得ない。さし当たり、産業組合拡充運動のような国家統制的な組織・事業のあり方に肯定的でないことを確認するととどめよう。

5 農村危機と産業組合拡充運動

1932年は産業組合の組織・事業拡張の一大転

図1 経済更正運動の組織機構



農林省「農村更正計画要綱」(1932年)による

機となった。農林省は1932年の救農議会に合わせて経済更正運動策定の準備を進めた。7月には「農村更生計画要綱」を定め、「農山漁民自ラ奮起シ自力更生ノ精神ノ下ニ組織的ナル農村経済更正計画ヲ樹立シ其ノ計画ニ基キ官民一致ノ努力ニ依リ経済的刷新ヲ期ス」(下線は筆者)趣旨を明確にする。そして、同年9月に経済更正部を新設。農村問題打開に向けて特段の体制を整えた。市町村における経済更正運動の推進体制は図1の通りで、役場・農会・学校とともに産業組合は重要な役割を受け持つこととなった¹⁶⁾。

農林省の「農山漁村経済更正計画ト産業組合ノ指導方針」は「経済更正計画中販売、購買、金融、利用等ノ経済行為ニ関スル事項及其ノ実行ニ付テハ産業組合ヲ中心」とする体制を目標とした。具体的には産業組合未設置町村の解消、一町村一産組、四種事業兼営化、全戸加入、事業全利用など。従来は農会の最末端機構であった部落小組合を産組に団体加入させることでほぼ全ての農家が編入された。法改正と予算担保を後ろ盾に、国や地方の各行政がこの政策を推進した。

これと軌を一にして同年10月に産業組合側の「産組拡充五カ年計画」が策定され、1933年1月から実施されたが、内容は農林省の「指導方針」そのものだった。全戸加入・事業刷新には農家を説得するだけでなく、農村商人や高利貸など産組の事業と競合する地域の抵抗勢力を攻撃すること

13) 奥谷松治『日本生活協同組合史』(民衆社・1973年)を参照されたい。

14) 賀川は資本主義もその代案の社会主義も退けて、友愛の経済組織=各種の協同組合と協同組合国家を主張する。その骨格は賀川豊彦『友愛の政治経済学』(日本生活協同組合連合会出版部・2009年)に示されている。

15) 大内秀明『ウィリアム・モリスのマルクス主義』(平凡社新書・2012年)を参照されたい。

16) 戦間期の農業問題と産業組合に関する基本構図は、中嶋信「昭和恐慌と農村産業組合運動」(鈴木文熹編『地域づくりと協同組合』青木書店・1990年)を参照されたい。

が不可欠である。そこで、産組若手職員や農村青年層が最前線に立って各地で行動した。その「前衛」が産業組合青年連盟である。村長など農村権威者の後ろ盾のもとに産青連が渋る農家を強引に説得して産組加入を推進した。また、前近代的な商人の資材貸し付けや農産物集荷を實力で妨害して産組事業を拡張するなど、行動は時に過激化した。そして、その後に商人らの商権擁護＝「反産運動」を広く招く一因ともなった。

その後の戦時体制下では農村統制機構となる組織と事業を、農村危機打開を求める「自主的な」エネルギーを結集して実現した点に特に留意すべきである。政治学者・石田雄が解明したように、「外見的に「革新的」な活動を展開することによって、反体制運動のエネルギーを産業組合の中に吸収し、同時にこの産業組合の下部を部落秩序と一本化することによって、協同組合主義による共同体的秩序の再編が行われた」¹⁷⁾のである。自主性を主張して産組幹部と対立する産青連も散見されたが、一般的な状況は、賢治の協同組合理念とは異なった方向に「善導」され、農村社会は沈静へと向かう。

6 賢治の期待と現実

深刻な社会問題をいかに解決するかをめぐり、巷間でも多様な思想や運動が錯綜する。しかもその様相は激しく移り変わる。成田龍一は、第一次大戦終了から満州事変に突入する「戦間期」の日本の思想潮流を、「A 民本主義、B マルクス主義・社会主義、C 国粋主義、という三つの主張の鼎立」関係で説明している¹⁸⁾。日本社会を近代化する有力な論拠となった民本主義は、社会問題の激化と共に世論の支持を失い、時代の思潮は社会主義が席卷するかに変化する。だが、治安維持法（1925年）体制による左翼思想の弾圧と、満州事変（1931年）＝実戦の展開を背景にして自由な論議は急速に抑止され、国粋主義が一気に主流へのし上がる。そのような思潮の転換に多くの国民が揺り動かされる状況にあった。

農村問題でも同様の推移を確認できる。地主階級に反発する「土地を農民へ」の反体制的運動が急展開する。その後、階級協調体制と産組主義による「共存同栄」思想への動員へとすすむ。そして戦時統制の準備へと、思想は激突し合い、大きく変容した。賢治の詩「産業組合青年会」が〔草稿→下書き→定稿→発表〕と変容する九年間の過程は、B から C へと移行する時代と重なっている。賢治も時代の思潮と向き合いながら「もっと明るく生き生きと生活する道を見付けたい」（「農民芸術概論綱要」）と、模索していた。

先述のように、産組拡充運動が急展開する時期に、詩「産業組合青年会」が発表された。産業組合とりわけ青年の運動に、賢治が希望を託したことは確かであろう。では、1924年には錯綜していた思いが、1933年の時点でいかにして収斂されることになったのか。

この点について、栗原は、1924年には観念先行だった賢治が、羅須地人協会の農業実践を経て「夢は夢なりに具体性のあるものに修正」されたと捉える。身を教壇から田畑に移すことで農村改良の方策にリアリティが増したと理解しうる。ただし、私はそれは従であり、当時の産業組合をめぐる社会状況の急変という、外部環境に誘導されたことを主因と推定する。

また、大島は、岩手県内で産業組合の組織・事業の前進があったことを強調する。つまり、賢治の「夢」が現実化される時代を迎えたので発表したということだ。産組拡充が取り組まれた時期に、確かに農業構造は変化した。だが、私は、農民による商品化が進み、近代的な農村協同組合運動に転換する状況と過大評価してはならないと考える。地主と小作の階級対立に代表される前近代的な社会構造は存続していた。国家的戦略で保護された産業組合が、農家負債整理や生産統制の部面で機能を発揮し、旧秩序が再編されることで、農村社会の混乱は鎮められたのだ。経済更正運動及び産組拡充運動の核心はそこにあった。

賢治が詩「産業組合青年会」の発表を企図した

17) 石田雄『近代日本政治構造の研究』（未来社・1956年）62頁。

18) 成田龍一『大正デモクラシー』（岩波新書・2007年）237頁。

時点で、地域農業に関与する者は、産業組合の拡充と無縁ではいられなかった。賢治も同様である。産組の組織・事業の急成長はつとに報じられていた。賢治の教え子が地元の産組結成に尽力し、その産青連の会長となった事実もある¹⁹⁾、産業組合の動向についての情報は豊かであったはずだ。ただし、賢治は、政府や産組中央会の計画とは異なる独自のプランを温めており、「熱誠有為な」青年たちが自主的に産業組合を活用して農村社会を改良する道を見いだすことに期待を寄せていたと思われる。

しかしながら、期待と現実とが乖離したことは既に明らかになっていた。時と共に運動の自主的な性格は弱められ、統制団体的色彩が濃厚になっ

ていった。たとえば、かつて賢治らの奔放な行動を村の美風を損ねると排撃した老いた権威者たちが、依然として産業組合を指図し、若者らを「馬の足」として扱う状況は伝えられていただろう。詩を完成させる 1933 年の時点で、賢治はそのことに違和感を覚えていたはずだ。しかし、状況を転換する体力も方法論も得られなかった。

9 年前には賢治に向けられた「あざけるようなうつろな声」が、今、自主的な産青連を模索する若者たちに向けられている。この詩の出だしと末尾の冷やかなフレーズは、近代的な協同組合への期待と前近代的な現実との乖離に惑う賢治の心情が表出したものに他ならない。

19) 花巻農学校時代の教え子で羅須地人協会にも参加した菊池信一は、石鳥谷産業組合（1931 年発足）および石鳥谷産業組合青年連盟（1933 年発足）の結成に尽力した。板垣亮一「宮澤賢治と菊池信一」（石鳥谷歴史民俗研究会『いしどりや歴史と民俗』第九号・1991 年 3 月）による。